

1 × ∞

最速
で

経験値1で
レベルアップする俺は、

異世界最強に
なりました！

5



著 Yutaka Matsuyama
マツヤマユタカ
監 藍飴



登場人物紹介

CHARACTERS

ワイスマン

元々は敵対するゼークル伯爵の用心棒だったが、カズマたちの仲間になる。

レノア

アルデバラン王国第一師団参謀長の長子。父譲りの頭脳派。

カイゼル

帝国軍最強と謳われる
グリンワルド師団の長。

アリアス

アルデバラン王国の
王女。隣国に到着し、
国の再興を目指す。治
癒魔法を使う。

ゼロス

ネメセスという種族の
モンスター。人語を話
すこともできる。

カズマ・ナカミチ

本編の主人公。トラックに轢か
れ、気づけば異世界にいた。あら
ゆるスキルが経験値1でレベル
アップする。

第一章 刺客？

異世界に飛ばされた僕——カズマ・ナカミチは、何をやつてもあらゆるスキルのレベルが経験値1で上がる。そのため、見知らぬ土地での生活やモンスターとの戦いなどを楽々とこなせていた。ベルガン帝国に侵略されたアルデバラン王国を再興すべく、戦力強化のためにモンスターをティムしようと旅に出た僕と、仲間であり軍師のレノア。僕らはその旅の途中で黒ヒョウに似た知性のあるモンスター、ネメセス族のゼロスと出会う。

彼は同族を、姿を透明にできる謎のモンスターに皆殺しにされていた。僕は彼の仇討ちを手伝うことにして、その相手を追う。

ゼロスの仇の後をつけていくと、そこにグラドウスという悪魔がいた。僕は彼と戦うがまるで歯が立たず、意識を失ってしまう。

再び目を覚ましたときにいたのは、以前出会った漆黒の翼を持つ男——エニグマ。彼がグラドウスを倒したと言うが……

「そうか……僕はまつたく歯が立たなかつた。一回吹き飛ばされて、それで終わりだつたから……」

僕は、内から湧き上^あがる悔しさを必死で押し殺しながら言つた。

するとエニグマが苦笑する。
「相手は悪魔だよ？ 君がいくら特殊な人間だといつても、悪魔相手では歯が立たないのも仕方がなさいさ」

「そうかもしれないけど……」

エニグマがじつと僕を見つめた。

「自分は無敵だと思つていた？」

そう。僕はいつの間にかそんなふうに考へるようになつていた。
どんな相手であろうが、僕には勝てっこない。それどころか、足元にも及びはしない。

そう、いつの頃からか思つていた。

「そうだね。どんな相手でも勝てると思つていたんだ。思い上がりも甚^{はなは}だしいよね」

エニグマは、首を軽く横に傾ける。

「そつは言つても、人間相手なら君は無敵だらうからね。今回ばかりは、少し相手が悪かつたね」

「悪魔か……エニグマも、悪魔なんだよね？」

僕の問ひに、エニグマが妖しげな笑みを浮かべた。

「そうだよ。僕も悪魔さ」

「やつぱりね。そつだらうとは思つていたけど……」

「思つていたけど……何？」

「半信半疑だつた。本当に悪魔がいるなんて、やつぱり信じがたいし」

エニグマが納得した顔でうなずいた。

「そつだらうね。僕ら悪魔と君たち人間が出会うことはあまりないからね」

「うん？ ちよつと待つて。何か今、さらつと物凄く重要なことを言わなかつた？」

僕は慌てて問いかける。

「ちよつ、出会うことはあまりないつて、どういうこと？」

エニグマは軽く肩をすくめる。

「君の周りに、これまでに悪魔と出会つたことがあると言つている者はいる？」

僕は問われて考える。そして首を横にゆっくりと振つた。

エニグマは僕の仕草を見て、微笑^{ほほえ}んだ。

「そつだらう。つまりはそういうことさ」

「じゃあ、今こうして僕たちが出会っているのは、異常な状態だつてこと?」

「そう。通常、悪魔は人間に干渉しないからね」

それを聞いて、僕は眉をほそめた。

「だったら君は、わざと異常な状態を作つたつてこと?」

エニグマが鼻を鳴らす。

「異常な状態を作つたのは、君の方さ。僕は、あくまで君をただ観察していただけであつて、干渉するつもりはなかつたんだよ。それなのに君は、マフィアのアジトの屋上にいた僕を目ざとく見つけてしまつた。だから、仕方なく挨拶あいさつしたんじやないか」

僕の眉間には深い皺しわが刻まれたであろう。

「僕が悪いって言いたいの? 僕が見つけたからつて、別に挨拶なんかしなくてもいいじゃないか。君には背中の翼があるんだから、僕がアジトの階段を駆け上がりつていてるときに飛んで逃げればよかつたんだ。でも君はそうしなかつた。なぜなら、それが君の意思だつたからだよ。違う?」

エニグマは僕の言葉をふんふんとうなずきながら聞き終えると、ニヤリと嫌らしく口の端を上げた。

「そうだね。確かにその通りなんだけど。ただ、僕をその気にさせたのは、やっぱり君さ」「意味がわからない。でも、まあいいさ。」

僕は口をすぼめて肩をすくめた。

「とりあえずお礼は言つておくよ。助けてくれてありがとう」

エニグマは眉尻まゆじりを上げ、大げさに両手を大きく広げた。

「どういたしまして。他に御用はあるかい?」

僕は疲れていた。身体を吹き飛ばされ、地面にいやといつほど叩きつけられたのだから当然だろう。だから、もうこれ以上話す気力もない。

「いや、特にはないよ」

すると、エニグマががっかりした表情を作つた。

「それは残念。では、僕はこれで去るたたとしよう。またいつか、どこかで」

エニグマはそう言うと、さつと踵きびすを返した。

だが途中で思い直したのか、ふと振り返つた。

「そうだ。君に、プレゼントを用意しておくよ」

「何? プrezentつて」

僕は不審な気持ちをそのまま声に出した。

エニグマは不敵に笑つた。

「あとでわかるよ」

そう言つた直後、エニグマの姿が揺らめいた。

僕は驚き、彼を凝視する。

次第に揺らめきは大きくなり、そしてエニグマの姿が薄らいでいく。僕が唚然としているうちに、エニグマは虚空に消え失せてしまつた。

「……あ……」

僕は虚しく、ただそれだけを呟いた。

さすがは悪魔と言うべきか。突然目の前から消え失せるなんて。

それにしても疲れた。身体がふらふらだ。

僕はゆっくり膝を折り、地面に体育座りになつた。

「ふう……」

目を瞑り、大きく息を吐き出しながら首を垂れた。

途端に眠気が襲つてくる。

ダメだ。眠すぎる。意識を保てる自信がない。

仕方がない。

僕は地面に横たわつた。

少しだけ寝よう。少しだけ……少しだけなら……いいだろう……

そうして僕の意識は瞬く間にブラックアウトした。

*

「カズマ……カズマ……」

誰かが僕の名前を呼んでいる。

「カズマ……大丈夫なのかい？ ……ねえ、ちょっと返事をしてよ！」

誰だろう？ 僕の名前を呼ぶのは——少し甲高くて張りがある。若いのかな？

ああ、でもなんかダメだ。頭の中で、いろんなものがぐちやぐちやに混ざり合つてゐる感覚がある。ちゃんとものを考えられない。

僕は今、どこにいるんだろう？ 確か……

あれ？ どうしたんだろう。思い出せない。

凄い疲れているんだ。だから思い出せない。

「カズマ、お願いだから返事をしてよ」

僕の名前をしつこいくらいに呼んでいる。

ダメなんだ。起きられないんだよ。疲れているんだ。

「死んではいない。だが意識が混沌しているようだ」

先ほどまでの若い声とは別の、老成したような落ち着き払った声がした。
どちらの声も、聞いたことがある気がするんだけど……

「カズマ！」

その瞬間、僕の身体がびくりと反応した。

一息に目を大きく見開く。

暗い。これは……夜だ。

えっと……僕は……確か……

仰向けに横たわる僕の視界に、懐かしい顔が飛び込んできた。

これは……レノアとゼロス！

僕はようやく意識を取り戻し、身体を起こそうとする。

だが力が上手く入らなかつた。

「うう……」

思わずうめき声が口から漏れる。

そこへ、喜色満面となつたレノアが叫んだ。

「カズマ！」

「……レノア……」

僕の口から、ようやくちゃんとした言葉が発せられた。

それを聞いて、レノアがさらに喜ぶ。

「よかつた！ 意識を取り戻したんだね？ でも、大丈夫かい!?」

途端にレノアが不安げな顔を見せる。

僕は深呼吸をしたあと、ゆっくりとうなづいた。

そして、静かに身体を起こそうとする。

今度は上手くいった。

なんとか上半身を起こしてから、僕は一人の顔を交互に見比べた。

「ごめんね。心配かけたよね？」

レノアが首を横に大きく振る。

「そんなことは気にしなくていいさ。でも君、本当に大丈夫かい？」

「無理をすることはない。もう少し横になつていたらどうだ？」

レノアに続いて、ゼロスが言った。

「大丈夫。もう心配いらないよ。それより、いつの間にか夜になつっていたんだね」

「しばらく経つても戻つてこないから、心配して来たんだけど、この奇妙な建物はなんなんだい？」

それに、地下の黄金の……あれは宮殿か何かなのかい？」

レノアの問いに、僕は苦笑する。

「さあ、誰が造ったのかはわからないけど、ここに悪魔が棲みついていたのは間違いないよ」
すると、レノアが身体を仰け反らせて驚いた。

「悪魔たって!?」じやあ、もしかして……この前のエニグマが?」

「ああ、いや、そういうわけじゃなくて、でもエニグマもさつきまでここにいたんだけど、いや、
そういうことじやなくて、その、なんていうか」

「やはりまだ意識が混濁しているようだな。無理をせずに寝ているといい」

ゼロスが顔を曇らせる。

僕は慌てて手を振った。

「いや、そうじゃないんだ。順を追つて説明するよ」

僕は、二人に一連の出来事を詳しく説明した。

はじめ二人は、ほとんど半信半疑といった顔だった。おそらく、まだ僕の意識が混濁しており、
夢でも見ているんじゃないかとも思っていたのだろう。

ただ、僕の話が詳細だったためか、次第に二人は真剣に聞き入っていく。

そして僕が語り終えるや、レノアとゼロスは驚いた表情で互いの顔を見合させた。

「やつぱりあのエニグマは、まぎれもなく悪魔だつたんだね？ それにここには、そのエニグマと
は別に、グラドウスという悪魔が棲みついていたつてわけだ」

レノアが僕に確認する。

「そういうこと。大変な目に遭つたよ。とんでもない強さだつた」

「君が手もなくやられるなんて……さすがは悪魔というか、なんというか」

「そうだね。開いた口が塞がらないほどの差だつた。根本的な種としての違いを感じたよ」

「うーん、でもそのグラドウスを、エニグマは倒したんだよね？」

「見てはいなければね。嘘は言つていないとと思う。実際、グラドウスはもう影も形もないわけだし」

レノアがうなずいた。

「そのようだね。しかし、悪魔がいるというのは信じがたい話だよ」

「でも、本当にいるんだよ。僕は実際に会つてている」

「もちろん、君の言葉を疑つているわけじやない。それどころか、君の言うことは全面的に信用し
ている。でもね、それでもなお、やつぱり自分の目で見るまでは信じがたいのさ」

僕は納得した。相手は悪魔だ。すぐに信じられるはずもない。

「そりだろうね。僕がレノアの立場だったら、やつぱり信じ切れないだろうし」

「そりだろうね。僕がレノアの立場だったら、やつぱり信じ切れないだろうし」

「そりだろうね。僕がレノアの立場だったら、やつぱり信じ切れないだろうし」

られないのさ」

僕はゆっくりと首を縦に振る。

そこへ、ゼロスが割って入つた。

「いつまでもここで話していくても仕方がない。下へ降りよう」

「そうだね。夜は冷えるしね」

レノアが賛同した。

僕も同感だ。

「よし、戻ろう」

僕らはそうして、この奇妙な神殿をあとにした。

「で、彼らをどうする？」

崖地の上の草むらに戻つてきた僕らは、そこでしばし座つて相談することにした。

「レノアが口火を切つて、眼下にいる、ゼロスにとつて仇となるモンスターの一族について尋ねた。

「僕が下に行つてみるよ」

僕がそれに応じる。

「行つてどうするつもり？」

レノアがすかさず問いかけてきた。

僕は答えに逡巡した。行つてどうするか。問答無用で戦うのか、それとも話ををするのか。しかし、

話が通じるものだろうか。わからない。そんなことは行つてみなければわかるはずがない。

「行つてから考えるよ」

レノアが肩をすくめた。

「そういうのは考えなしつていうんだよ」

今度は僕が肩をすくめる番だ。

「それでもいいさ。ここでじつと観察していたつて何も始まらない。まずは行つてみることだ」

レノアが顎に手を当てて考え込んだ。

「しかし……」

「大丈夫だよ。僕なら彼らにやられることはない。悪魔には完敗したけど、彼らには問題なく勝てるよ」

「それはそうかもしれないけど……」

逡巡するレノアを見かねて、ゼロスが言つた。

「もし、彼らと話をするとして、どう意思の疎通を図るつもりだ？」

「うん。それも考えてなかつた。彼らがゼロスのように会話ができるとは限らない。

しかも、話をするにしても、どんなことを話すかだけ……
やつぱり出たとこ勝負だな。

「わからない。とにかく行つてみるよ」

レノアとゼロスが顔を見合せた。

次いで僕に視線を合わせると、レノアが言つた。

「仕方ない。確かに動かないことは何も始まらない。でも、危険を感じたらすぐに戻つてくれよ」「わかった。じゃあ行つてくるよ」

僕は早速腰を上げた。

そして眼下の窪地を見下ろす。

先ほどとは違い、もう夜だからか、外には誰もいない。

みんな家の中にいるのだろう。だが灯りはついていない。

それも当然か。高度な知能を持つゼロスですら火を扱えないのだから。

僕はゆっくりと歩を進めて、窪地の縁に足をかける。

それから、そのまま坂を下りていく。

一步一歩確実に、集落へと向かう。

話はできるだろうか。

わからない。そもそも言語を持たない種族の可能性もある。そうなつたら、いきなり戦闘に突入するかもしねれない。

そのとき、子供が目に入つたら、僕はどうするだろう。

これもわからない。出たとこ勝負とは言つたものの、さすがに考えなしにもほどがあるか。

それではレノアも肩をすくめるしかないね。

でも、他に方法も思いつかない。

虎穴に入らずんば虎子を得ずだ。

僕はどんどん集落に近づいていく。

すると、一軒の家から誰かが出てきた。

大柄な体格に見えるので、たぶん雄だな。

その彼が大きく伸びをした。

そして伸び終えるなり、集落を横切る川に向かう。

川にたどり着くと、すっと腰を落とし、手で水を掬つて飲みはじめた。

僕はその間も、静かにゆっくりと坂を下つてている。

水を飲んだ彼は、ふと首をめぐらした。

その視線の先には――

僕がいた。

僕の目と彼の目が合つた。

途端に彼が顔を上げ、天に向かつて高らかに吠えた。野獸のような雄叫びが、夜の闇にこだまする。と、様々な家々の扉が開いた。次々にかの種族の者たちが飛び出してくる。

だが僕は、さりに下つていく。

彼らは、はじめ戸惑つてゐるようだつた。

だが最初の彼が僕を指さし、何事かを告げたことによつて、動搖は収まつた。

ということは、少なくとも彼らは言語を持つてゐるということだ。

あとは、僕との意思疎通ができるかだが――

そのとき、彼らが横一列に並びはじめた。

僕がいぶかしんで見てゐると、今度はみんな一齊に膝を折つて中腰となつた。

いや、さらには腰を落として、上半身を前に倒しはじめている。しまいには、手を前に伸ばして手

のひらを地面につけた。

これは――僕には土下座してゐるように見えた。

僕は眉根を寄せつつ、彼らに近づいていく。

彼らはその間、平伏したまま微動だにしない。

僕は坂を下りきり、彼らのそばへ行く。

一步二歩距離を詰め、彼らの三メートルほど手前のところで止まつた。

「君たち、言葉はわかる?」

とりあえず話しかけてみた。言葉が通じればいいのだが――

すると、中央のひときわ大きな者が、身体を少しだけ起こしながら言つた。

「……す、すこし……わかる……」

僕は驚いた。

会話ができることを期待はしていたものの、言葉を発することができるモンスターはめずらしい
という。レノアもゼロスと出会つた際にはとても驚いていた。

「僕はカズマと言ふんだけど、君の名前は?」

「ズワウス」

「ズワウス?　君がこの集落の代表者なの?」
ズワウスはうなずいた。

「君たちの種族の名前は?」

「ラーズ」

「ラーズ?　ラーズ族か」

ズワウスがまたもうなずいた。

よかつた。どうやらちゃんと意思疎通そつうができるようだ。

なら、もつと聞いてみよう。

「君たちは……その、なんか土下座どげざしているように見えるんだけど？」

するとズワウスが頭を下げた。

「従う」

「え？ 従う……僕についてこと？」

ズワウスが首肯した。

僕は戸惑とまどつた。

「どういうこと？ いきなり従うなんて……いや、もちろん僕もその方がいいんだけど……その理由は何？」

ズワウスは少し考えてから答えた。

「従え……言われた……」

「誰に？」

僕は間髪かんぱつをいれずに問い合わせる。

ズワウスは返答に少し間をおいた。

「……エニグマ……」

そういうことか。エニグマが最後に言つたプレゼントって、これのことか。
つまり、彼らを僕に従わせるから、あとは好きにしろってところかな。
確かに、透明になる種族なんて、味方にしたらありがたい存在だ。斥候せつこうにすれば最高だろう。
だけど問題は――

「君たちはネメセス族つて知つてるよね？」

ズワウスはゆつくりと首を垂たたれた。

「君たちはそのネメセス族を根絶ねんぜつやしにした。そうだね？」

ズワウスは無表情のまま、うつむくようにうなずいた。

「なぜ、そんなことをしたんだい？」

ズワウスは答えた。

「命じられた」

「誰に？」

「グラドウス」

「グラドウスか。もしかして、君たちはこれまでずっとグラドウスの支配下にあつたの？」

ズワウスは苦々しそうに首を縦に振る。

「だけど、そのグラドウスはエニグマによつて倒された。君はそれを見ていた?」

うなずくズワウス。

僕は続けて言つた。

「つまり、君たちの支配権はエニグマに移つた。そのエニグマが僕に従えと言つた。そういうことだね?」

ズワウスはこくりと肯定する。

なるほど、そういうことか。だけど――

「それはわかつた。だけど、ネメセス族を襲つた理由はなんだつたの?」

「玉」

やはりか。ゼロスが身体の中に隠し持つていた、ネメセス族に伝わる神様からの聖遺物――虹色の球体が、グラドウスの目的だつたか。

「なぜ玉が必要だつたの?」

ズワウスは少し戸惑つた表情を見せた。

「……わからない……」

「それは、グラドウスは特に理由を言つていなかつたつてことかな?」

ズワウスはうなずいた。

「でも、それなら殺す必要はなかつたんじゃないかな」
ズワウスは答える。

「殺せ……言われた……全員……殺せ」

「グラドウスに? その理由は?」

「ネメセス……秘密……知つてる……だから」

「玉の秘密を知つているから、ネメセス族を根絶やしにしろつてことか」

ズワウスは重々しく首を縦に振つた。

なんてことだ。ネメセス族は虹色の玉を大事にはしていた。でもその意味は、長い年月の中で失われたという。

だから、あの玉にどんな秘密があるのかなんて、ネメセス族の誰も知らないのだ。それなのに

「君たちは、グラドウスに言われたことをやつただけなんだね」
ズワウスは無言でうなずいた。

これは、仕方がない、と思う。あのグラドウスに命じられたら、従うほかないだろう。僕だつて一撃でやられてしまつたんだ。彼らが逆らえるはずがない。
だけど、僕はそれでよくても、ゼロスは――

参ったな。どうしたらいいのか。

すると、僕の背から声がした。

「カズマ」

驚いて振り返つてみると、そこにはレノアとゼロスがいた。

僕が気づかぬうちにこの窪地くぼちに下りてきてたんだ。

「レノア、それに……ゼロス」

「どういう状況？ 彼らはどうしちゃつたの？」

困惑している僕に、レノアが言つた。

「どうやらエニグマに命令されたらしい。僕に従えつて」

レノアは肩をすくめて、眉尻まゆじりを跳ね上げはあた。

「へえ！ なるほど、そういうことか！」

「それで、色々と聞いていたんだけど……どうやら、彼らはこれまでずっとグラドウスに支配され

てきただらし

「容易に想像できるね。あんな近くにとんでもない悪魔が陣取つていたんじゃ、従うしかないだろ

うね」

「ネメセス族を襲つたのも、グラドウスが命じたかららしいんだ」

「容易に想像できるね。あんな近くにとんでもない悪魔が陣取つていたんじゃ、従うしかないだろ

うね」

「容易に想像できるね。あんな近くにとんでもない悪魔が陣取つていたんじゃ、従うしかないだろ

うね」

僕はレノアに答えるようにして、ゼロスに向かつて言つた。

ゼロスはなんて言うだろうか。僕は待つた。

すると、ゼロスが口を開いた。

「そうか……わかった」

わかつたと言つた？

それはつまり——ラーズ族ゆるを放すこと？

だけど、僕は直接そとは尋ねられなかつた。

さすがに気が引けたのだ。

それはレノアも同じだつたようで、しばしの間沈黙が流れた。

その静寂を打ち破つたのは、当のゼロスだつた。

「憎むべきは、グラドウスということだ」

そう言うと、ゼロスはゆっくりと身体をめぐらして、僕らから遠く離れていつた。

そう。そうなんだよ。悪いのはグラドウスなんだ。彼らラーズ族じやないんだ。

いや、もちろん彼らにもまったく罪がないわけじゃない。直接的に手くだ下したのは彼らなのだから。

だけど、グラドウスに逆らえばどうなつたか。レノアじやないけど、容易に想像がつくことだ。

彼らには他に選択肢はなかつた。従うしかなかつたんだよ。

だからゼロスも、憎むべき対象はグラドウスだと言つたんだ。

僕はゼロスの寂しげな後ろ姿を眺めながら、そう思った。

僕とレノアは、その後もズワウスに色々と話を聞いた。

いつまでも平伏されていては居心地が悪いため、他の者たちには家に入るよう伝え、ズワウスだけを残し、車座に腰を下ろして話を聞いた。

やはり知りたいのは、あの神殿のことである。聞けば、確かにあの神殿を築いたのは、ラーズ族らしい。

ただ、あの建物にどんな意味があるのかは、彼らは何も知らなかつた。

また、ズワウスはエニグマに言われたらしい。あの神殿も、その地下の黄金も、すべて僕、カズマのものにするがいい、と。

それを聞いて、レノアは狂喜乱舞した。

それはそうだろう。国を取り戻すためには財力がいる。傭兵や装備などにかなりの金額が必要となるからだ。

しかも、仮に無事に国を取り戻せたとしても、復興にはさらに莫大なお金がかかることだろう。だけど、あの黄金の量ならば、それを差し引いても充分お釣りが出る。

レノアはすぐに皮算用を始めた。顔がにやついている。

僕は軽くため息を吐くと、ゼロスを捜そと立ち上がつた。

首をめぐらし、ゼロスを捜しながら歩く。

ほどなくして、ゼロスを見つけた。

彼は川辺で四肢を折り曲げ、水の流れを眺めていた。

僕は彼に近づき、そつと声をかける。

「大丈夫？」ゼロス

ゼロスは僕の接近に気づいていたようで、落ち着いた様子であつた。

「心配はいらない」

「そう。でも、ちょっと話していい？」

僕は、ゼロスの横に座ろうとした。

ゼロスは、僕の様子を見つめながら答えた。

「ああ。もちろん構わない」

僕は安心して腰を下ろした。

「やっぱり、すぐには割り切れないよね？」

ゼロスはしばし沈思黙考した。

僕はその間、無言で待つた。

やがて、ゼロスが口を開いた。

「そうだな。心の整理をするには、もう少し時間がかかるな」

「そうだよね。いくら命令されたからといって、実行したのは彼らなわけだし……」

ゼロスは伏し目がちになつた。

「わかっている。彼らに他の選択肢などなかつたことは。だが心の整理とは、理屈とは別のものなのだ」

「感情だよね。理屈ではわかっていても、感情は別。だから、時間がかかるつてことだよね」

「そうだな。だが、そんなに時間がかかりはしないだろう。わたしは今、落ち着いている。ゆえに、間もなく整理もつくと思う」

「わかった。なんか邪魔しちゃつたね」

すると、ゼロスが微笑んだ。

「そんなことはない。わたしはいつでもお前を歓迎している」

「ありがとう。じゃあ、あとでね」

僕はそう言うと、すつと立ち上がった。

そして踵を返して、ゼロスのそばから立ち去つた。

途中、一度だけ振り向いてゼロスを見た。



やはりその背は、寂しそうに見えた。

*

「この集落の座標はわかつた。また日を置いてここに戻つてくることにしよう」

レノアが意気揚々と言つた。

僕らはラーズ族の集落で一泊し、今後のこと話を話し合つた。

とりあえず、モンスター・タイムの旅を切り上げ、一旦、拠点があるオルダナ王国の王都ミラベルトへ戻ることにした。

冒険者グッズの中にはかなり高度なコンパスと地図があり、それによると、この場所は森全体から見ればまだ端の方にあるらしい。なので、相応の護衛をつける必要はあるものの、黄金の採取や運搬は比較的容易に行えるとのことだつた。

つまり、その手配を早速したいがために、旅を切り上げることにしたのだ。

「お金、お金。お金は大事だよ！」

レノアは昨日からずつと、取りつかれたように言つている。

僕は思わず苦笑した。

「あ、また笑つたね？」

レノアに咎めるように言われ、僕は肩をすくめた。確かに、笑つたのはこれが初めてではない。

「お金が大事なのはわかるよ」

「本当に？ これは降つてわいた天恵のようなものなんだよ？ 君が持つてきてくれたグランルビーは大事な軍資金だけど、あれだけでアルデバランを取り戻そうとするには、少々心もとなかったんだ。そこへきてあの黄金の莫大な量だ！ ああ、なんとありがたいことか。あれだけあればなんでもできるつもんさ！」

僕は浮わついたレノアを見て、再び肩をすくめた。

「はいはい。だから一旦戻るんだよね？」

「うそ。なにせ量が多いからね。早めに段取りしておかなきゃね」

「わかつたよ。じゃあどうする？ 早速出発する？」

「する！」

レノアは間髪をいれずに答えた。

僕はうなずくしかなかつた。

そこへ、ゼロスが静かに近寄ってきた。

「出発するようだな」

「方針変更だ。モンスターITEMは、また後日やることにしたよ」

レノアが答えた。

「そうか。わかった」

「ゼロスはどうする？」

僕はゼロスに向かつて言つた。

「お前たちがよければだが、同道したいと思つていてる」

「本当に!? それはうれしいよ！」

「ありがたいね！ でも町へ出ても大丈夫かい？」

レノアも、僕と同感だつたようだ。

すると、ゼロスがニヤリと笑つた。

「こう見えて、わたしも若い頃は、町に出たことがある」

「ううなの?」

僕の問いに、ゼロスは微笑(ほほえ)んだ。

「その際に、お前たちの言葉を覚えたのだ」

「そうだつたんだ。じゃあ、最初からしゃべることができたわけじやなかつたんだ」

「無論そうだ。好奇心旺盛(おきせい)な人間がいてな。丁寧に言葉を教えてくれたものだ。初めは上手く発音

できなかつたが、次第にできるようになつた。今ではこのとおりだ。聞きづらくはないだろう？」

僕は笑みを浮かべてうなずいた。

「まったく問題ないよ。ものすごく綺麗(きれい)な発音だよ」

「そうか。それは勉強した甲斐(かい)があったというものだ」

ゼロスはそう言って笑つた。

よかつた。もうすっかり元のゼロスに戻つてている。どうやら心の整理ができたらしい。

僕はほつと胸をなでおろした。

「よし、じゃあ早速出発しよう」

レノアが元気よく言う。そこへ、僕が疑問を投げかける。

「でも、ラーズ族はどうすればいい？」

レノアがにやりと口の端を上げた。

「ズワウスには綿密に話をしておいた。いずれ近いうちに僕の手の者が黄金を探りにやつてくるから、よろしく頼むとね。幸いズワウスは、たどたどしいけど言葉が話せるしね。混乱はしないと思うよ。それと、いざアルデバラン奪還作戦を発動する際には、森を出て僕らに協力してもらうよう言つておいた」

「そう。それは頼もしいね」

「ああ。姿を消せるなんて能力は、斥候せつこうにもつてこいだよ。それに、ちょっとした潜入とか、他にもいろいろな使い道があるね」

確かに。ラーズ族の能力は汎用性はんようせいが高そうだ。

「ところでレノア、デュランドルはどうする？」

デュランドルとは、この森で僕がティムしたブロントサウルスのようなレアモンスターのことだ。

「この村に置いていく。ラーズ族同様、いざその時を迎えるまではね」

「じゃあ、三人で戻るつことだね」

レノアが我が家意を得たりと、にんまりした。

「そういうこと。以前のように巨大モンスターを引きつれていくとなると、移動に時間がかかるでしょうがない。今回は一刻も早く戻ることを優先させたいんだ」

どうやらレノアは、どうしても急いで黄金を換金したいようだ。

僕は苦笑した。

「わかったよ」

僕の同意を得て、レノアが大きくうなづいた。

「では改めて、王都ミラベルトへ向けて出発するどしよう！」

レノアが声高らかに宣言した。

「おう！」

僕は仕方なく応じた。

そうして僕らは、ラーズ族の集落を後にして、王都へと戻ることとなつた。

*

僕らは、森を出たすぐのところにある小さな町へと入つた。

すでにラーズ族の集落を後にして歩き続けること、数日が経っている。さすがに僕も疲れていた。

僕が疲れるくらいだから、レノアはもうバテバテで、今にも倒れそうなくらいだ。

「ひとまず宿に入ろう」

僕がそう言うと、死にそうな顔をしたレノアが、フラフラしながら答えた。

「……ああ……そうしてくれ……もうさすがに……倒れそうだ……」

「宿は……うん？ あの看板は、バーン商会のものかな？」

僕は道の先に、僕たちに協力してくれているバーン商会の支店を意味する看板を見つけた。すると、レノアがむくりと顔を上げた。

「バーン商会か。王都への連絡もあることだし、一旦そこへ入ろう」

「大丈夫？ 宿で休んでからにしたら？」

僕は心配してそう言うも、レノアは首を横に振った。

「一報だけでも入れておかないと。先に準備しておいてくれれば、時間短縮になるしね」

確かにそれはそうだろうけど……

僕がレノアを見ると、すでに商会の方向に足を向けていた。

これは言つても聞かないな。

僕は諦めて、言つた。

「わかった。じゃあ、とりあえず商会に寄ろう」

僕らは宿に入るのは後回しにして、バーン商会の支店へ入った。

「ちよつと王都に連絡したいことがあるんだけど」

フラフラしているレノアが尋ねると、カウンター越しに商会員が応じた。

「王都に？ 構わないよ。手紙でいいかい？」

「いや、速攻便で」

この一言に、商会員の目がキラリと光つた。

「ほうほう、速攻便とね。高いよ？」

「金はいくらかかっても構わない。できるだけ早く王都に伝えたいことがあるんだ」

「ほうほう。それはそれは。では手配するが、前金だよ？」
レノアは懐から麻袋を取り出すと、縛つてある紐を緩めて中身を取り出した。
何十枚もの神々しい輝きを放つ金貨だ。

「何枚いる？」

レノアの言葉に対して、商会員がニヤリと笑つた。

「連絡文を速攻便で出すってことでいいんだね？ なら、一枚で充分だよ」

レノアは金貨を一枚だけ指でつまむと、カウンターの向こうにいる商会員に手渡した。

「毎度あり！ それで、受取人はどういった方で？」

「アルデバルラン王国のアリアス王女殿下だ」

途端に商会員の顔つきが変わった。

ギュッと眉根を寄せて、僕らの顔をじろじろと見る。

「アリアス王女殿下だって！ もしや、あんたたち……」

商会員は目を見開き、僕とレノアの顔を交互に見ていく。

ここはバーン商会の支店だ。僕らのことを聞いているのかな。

「僕はカズマ・ナカミチ。彼はレノア・オクティス」

僕がそう言うと、商会員の目がさらに大きく見開かれた。

そして、慌てた様子で手元の書類から何かを探し出した。

「ちよ、ちょっと待つてくれ！ ええと、これじゃない、これでもない……あつた！ これだ！」

商会议員は手元の書類から一枚の紙を取り出ると、顔を上げて僕らを見た。

「あんたら、間違いなくカズマ・ナカミチとレノア・オクティスなんだな!?」

焦った様子の商会议員は、あらためて僕らに尋ねた。

僕はいぶかしながらも答える。

「はい。間違いないです」

すると、商会议員はカウンターに身を乗り出し、僕とレノアの間に顔を入れて、耳打ちする。

「大変なことが王都で起きたんだ。それで、バーン商会の全支店に通達が出ていたんだ。カズマ・ナカミチとレノア・オクティスが現れたらその件を伝えるようについてな」

僕は驚きながら、問いかけた。

「何があつたんですか？」

商会议員は一度つばを飲み込み、僕らの顔を交互に見てから口を開いた。

「——アリアス王女殿下が刺客に襲われたんだ」

僕はギョツとして、二の句が継げなかつた。

代わりに、レノアが怒りをあらわにしながら勢い込んで尋ねる。

「なんだと!? 殿下はご無事なのか!？」

商会议員は困った顔で首を横に振つた。

「怪我を負われたのは間違いない。だが、怪我の具合はそれほど大したことはないらしい。少なくとも、命に別条はないようだ」

僕は少しだけ胸をなでおろした。

だが、レノアの怒りは収まらない。

「くそっ！ やつたのは誰なんだ！」

レノアが叫ぶと、商会议員が手元の資料を読みつつ、衝撃的なことを口にする。

「犯人はワイスマンという男らしい。でも逃げられたみたいだな」

「なんだって!? ワイスマンが!? どういうことだ? ワイスマンがなぜ……訳がわからない。」

ワイスマンは、僕たちに敵対するゼークル伯爵の用心棒だつたけど、彼に嫌気がさして僕たちの側についたはず……

天井を睨んだレノアがまた叫んだ。

「ワイスマンのやつめ！ どういうつもりだ！ 僕らを騙したのか！」

なんてことだ。疲れている場合じやない。とんでもないことが起こってしまった。

そのときレノアが、決意を込めた表情で言つた。

「速攻便はやめだ。代わりに、僕らを王都まで最速で運んでほしい。できるか?」

商會員は真剣な表情でうなずいた。

「わかつた。王都までの途中の町に、それぞれ替えの馬車を用意させる手配をしておく。あんたたちはこっちへ来てくれ」

商會員はカウンターから出ると、そのまま店の外へと出た。

僕らはその背を追う。

商會員が馬車屋の前で大声で言つた。

「おい! 一番イキのいい馬車を用意してくれ!」

すると、店の奥から男が出てきた。

「おお! バーン商会の、ちょっと待つてな」

男は店の奥に引っ込んだが、すぐに奥から馬車を引いて戻ってきた。

「こいつがうちの店で一番イキがいいぜ」

商會員は馬の様子を鋭い眼差しで検分してから、馬車屋の男に向き直つた。

「いいだろ。超特急だ。カーロンの町までひとつ走りしてくれ」

「カーロンだつて!? ずいぶんと遠くまでだな」

「最終目的地は、王都ミラベルトだ」

「なんだつて!?. そうか、乗り継ぎか」

「そうだ。カーロンにはわたしから連絡しておく。腕のいい御者はいるか?」

馬車屋が渋い顔をした。

「いやそれが、今ちょっと手薄なんだよ」

「それは困る!. 誰かいなのか?」

商會員が馬車屋に詰め寄る。

「どうやらここは、僕の出番のようだ。

「御者は僕がします」

商會員は僕を見て、いぶかしんだ。

「あんたが? 大丈夫なのか、だいぶ疲れているように見えるが……」

僕は商會員に対して、につこりと微笑んだ。

「大丈夫です。僕は馬の扱いに長けてますから」

レノアがうなずきながら僕の案に同意した。

「カーロンまでは彼が御者をする。ただ、それ以降は御者も用意しておいてほしい」

商會員は首を縦に振った。

「わかつた。じゃあ、行く先々の町へは伝言鳥を飛ばして連絡しておく」

商会員の回答にレノアは満足げに首肯すると、僕に向き直った。

「では頼むよ。カズマ！」

レノアが言う前に、僕は御者台ごよしゃだいに乗つていた。

「いいでもいいよ！」

レノアも無言で馬車に乗り込む。ゼロスも続いた。

「二人とも乗つたね。じゃあ連絡をよろしくお願ひします！」

僕は商会員に向かつて言うなり、手綱たづなを勢いよく振った。

すぐに馬が反応して歩き出す。

そうして僕らは商会員と馬車屋が見送る中、王都ミラベルトに向けて出発した。

第二章 潜入？

僕らが一昼夜をかけて走り切り、王都ミラベルトに到着したのは、まだほの暗い明け方であつた。だが、まだアリアスの居館まではもう少しある。

御者ぎよしゃが最後のひと踏ん張りとばかりに、手綱たづなを振る。

木製の車輪が石畳たたを激しく叩く。

まだか。まだ居館は見えないか。

レノアは疲れ切つて、気絶したように僕の隣で眠つている。

ゴトンッ！

最高速で駆け抜けているため、ちょっとしたもの踏んでも馬車は大きく跳ねる。

でも、レノアは起きない。

いや、それでいい。レノアは頭脳担当だ。疲れていてはあまり意味をなさない。少しでも眠つて、元気を取り戻してもらわねば。